TELEMEDICINE

by Akitoshi Yoshida and Yoshihiko Kamehata

(Kogyo chosakai Publishing, 2000, A5, 220pp., $50)

秋　葉　　純

旭川医科大学眼科学教室では、1994年10月から北海道内の関連病院との間で、カラー動画送受信による遠隔医療を開始した。その後、教室を中心に多数の関連病院との間にネットワークを構築し、遠隔診断や遠隔手術支援などの眼科遠隔医療を実践している。さらに、1999年には旭川医科大学附属病院に国立大学では初の遠隔医療センターが開設され、眼科のみならず全診療科で遠隔医療に取り組んでいる。本書は、旭川医科大学眼科の遠隔医療の試みとその効果について記されたものである。

本書は10章と１枚のCD-ROMから成る。第１章は医療の地域格差と医療過疎を解決するために遠隔医療を行ってきた旭川医科大学眼科の実践の歴史と哲学について述べられている。第２章から５章までは、旭川医科大学がある旭川市とそのまわりを取り囲む北・北海道地域との医療格差の現状とそれを解決するために、なぜ遠隔医療が必要であるのかについて論じられている。第６章から９章では、視点を変えて、遠隔医療の経済面での効果とコスト負担の問題について論じられている。また、最終章では、情報スーパーハイウェイと遠隔医療の未来について書かれている。さらに、附属のCD-ROMを見ることにより、本を読むだけでは理解することができない遠隔医療の実際が手に取るように理解できる。

旭川医科大学眼科が行ってきた遠隔医療は北海道の旭川市を中心として展開されてきたものであるが、遠隔医療は決して一地域に限定されるものではなく、日本全体あるいは世界中へと発展するものである。また、眼科という一診療科にとどまるものではなく、やがては全診療科で遠隔医療が実践されるようになると予想される。本書は遠隔医療を考える際に、格好のテキストになるであろう。また、本書には、「人々がどこに住んでいても世界最高水準の医療を享受できる」ためには、遠隔医療が必要であるという著者らの哲学が一貫して書かれている。これからの地域医療を考えるために、医療に関わる者だけではなく、行政関係者にもぜひ読んでいただきたい一冊である。

ちなみに、著者の吉田晃敏氏は旭川医科大学眼科学講座教授、亀畑義彦氏は北海道教育大学旭川校教授である。なお、本書の日本語版『遠隔医療－旭川医科大学眼科の試みとその効果』が既に1998年に工業調査会から出版されていることを付記しておく。

（旭川医科大学　眼科学講座）